

中学生の社会的行動についての研究 (110)

—自殺念慮の変化と、家庭および友だちの要因の関連—

○山本ちか (名古屋文理大学短期大学部)
二宮克美 (愛知学院大学)
井上裕光 (千葉県立保健医療大学)

氏家達夫 (名古屋大学)
五十嵐 敦 (福島大学)

キーワード：中学生，自殺念慮

目 的

研究(108)では、中学生が自殺について考えたことがあるかどうか(自殺念慮)をとりあげ、中学2年生から3年生の間にどのように変化したのかを検討し、全体的自己価値および学校適応と、自殺念慮の変化との関連について検討した。その結果、男女とも多くの中学生は、自殺念慮がみられなかった。また中3時点で自殺念慮がなくなった群は、全体的自己価値の得点が上昇するという変化がみられた。本報告では、自殺念慮と関連する要因として、家庭の要因と友だちの要因をとりあげ、自殺念慮の変化とどのように関連しているのかについて検討する。

方 法

1. 調査項目 (1)自殺念慮：自殺について考えたことがあるかどうかを4段階評定(何度もあった、数回あった、一度だけあった、一度もなかった)でたずねた。今回は、「あった(一度だけあった～何度もあった)」と「なかった」の2件法に変換して分析を行った。

(2)家庭の要因：①親との関係の知覚：親との関係をどのように知覚しているかについて、規制の強さ、暖かさ、愛着、虐待傾向などの点から6段階評定でたずねた。因子分析の結果、親との愛着関係や暖かさについての「暖かさ(12項目)」と虐待傾向や厳しさなどを示す「厳しさ(6項目)」の2因子が妥当であると判断した。②家の中での嫌なできごと：家の中で3ヶ月間にどれだけ嫌なできごとがあったかを4段階評定でたずねた。高得点ほど嫌なできごとがあったことを示している。

(3)友だちの要因：①友だちとの関係の知覚：友だちとの関係で安心感、暖かさ、心配する傾向などをどのように知覚しているかを6段階評定でたずねた。因子分析の結果、友だちとの関係に安心や暖かさを感じている傾向を示す「暖かさ(4項目)」と、関係を心配する傾向を示す「関係の不安感(5項目)」の2因子が妥当であると判断した。②友だちについての嫌なできごと：友だちについて3ヶ月間にどれだけ嫌なできごとがあったかを4段階評定でたずねた。

2. 調査実施時期と調査協力者 自殺の項目についての調査は、中学2年2学期(2003年9月下旬)から、中学3年2学期(2004年9月下旬)までの間に、4回実施した。今回の分析には、中学2年2学期と中学3年2学期のデータを使用した。分析は自殺念慮の項目に2時点とも回答のあった愛知

県と福島県の女子中学生227名について行った。中2時点で自殺念慮が「あった」49名のうち、中3時点でも「あった」のは27名、「なかった」のは22名であった。また、中2時点で「なかった」178名のうち、中3時点でも「なかった」のは153名、「あった」のは25名であった。

結果及び考察

1. 自殺念慮の変化と家庭の要因の関連 親との関係の知覚の「暖かさ」と「厳しさ」、および「家の中での嫌なできごとと経験」を従属変数とする時点×自殺念慮の変化4群(中2時点「あった・なかった」と中3時点「あった・なかった」の組み合わせ)の分散分析を行った。親との関係の知覚では、「暖かさ」については交互作用がみられ、「中2:なかった, 中3:なかった」群($F=5.409, p=.021$)と「中2:なかった, 中3:あった」群($F=5.272, p=.022$)は、暖かさが低下していた。また、家の中の嫌なできごとと経験についても交互作用がみられ、「中2:なかった, 中3:あった」群のみ、嫌なできごとが増加していた($F=20.481, p<.001$)。

2. 自殺念慮の変化と友だちの要因の関連 友だちとの関係の知覚の「暖かさ」と「不安感」、および「友だちについての嫌なできごとと経験」を従属変数とする時点×自殺念慮の変化4群の分散分析を行った。友だちの要因については、家庭の要因とは異なり、「友だちとの関係の知覚」の2因子についても、「友だちについての嫌なできごとと経験」についても、自殺念慮の変化4群の主効果はみられたものの、交互作用はみられなかった。

3. まとめ 中3時点で自殺念慮がみられるようになった群は、親との関係での「暖かさ」を感じられなくなり、「家の中での嫌なできごと」が増加しており、家庭の要因が自殺念慮の変化と関連することが示唆された。

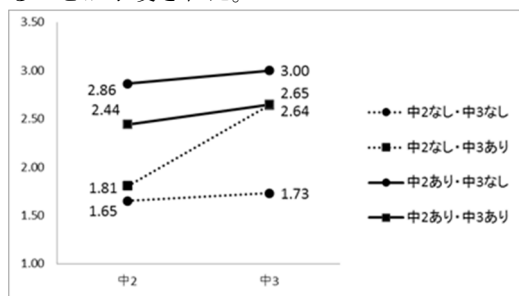


Fig.1 自殺念慮の変化4群ごとの家の中での嫌なできごとの得点の変化